

復刊

いざみ



目次

- P.1 はじめての古事記
P.2-3 所沢の歴史
(第21回図書館まつり
パネルと図書展示より)
P.4-5 所沢歴史物語
(第2回)
P.6 図書館活用法

はじめての古事記

根岸 貴子

『古事記』の名を知ってはいいても、内容は知らないという人がほとんどでしょう。でも「イナバノシロウサギ」や「ヤマタノオロチ」といえば、どこかで聞いたことがあると思う方もいらっしゃるかもしれません。こうしたお話は、もと『古事記』の神話の一部なのです。

私たちは図書館で働いていたころから、「子どもに『古事記』のお話を読んでやりたいけれど、高学年向きの本はむずかしいし、絵本の中にも適当なものが見つからない。低・中学年くらいで読める(読んでやれる)『古事記』がほしい」という声を耳にしていました。そこで、子どもの本研究所で、低・中学年向けに『古事記』の再話をしてみようと思ったのです。

『古事記』は、奈良時代に天武天皇が、神様たちから始まる天皇家の歴史を、後の世に正しく伝えるためにまとめさせた書物で、七十二年に完成しました。

原典は三巻。上巻は神代の物語、

中、下巻は神武天皇から推古天皇までの、人の世の物語です。研究所では上巻の神話の部分(「イザナキとイザナミ」から「ウミサチとヤマサチ」まで)を、やさしいお話の形に書き改めることにしました。

私たちは、まず原典を声に出して読むことから始め、さまざま現代語訳を読み比べながら、仕事をすすめていきました。

初めのうち、現代人の私たちは、古代の人のものの考え方に納得のいかないこともありました。でも自分たちが再話した文章を声に出して読み、また原典に戻る…それを繰り返すうちに、少しずつ『古事記』のもつ不思議な魅力がわかってきました。私たちはその神話的世界をこわさず「おはなし」として楽しめる本にしたいと考えました。

そのため、最初の高天の原の場面では登場する神様の数を減らし、その先の物語に興味をつなげるようにしました。また神話のも

つエネルギーを感じさせる簡潔な表現、声に出して読みやすい文体を工夫しました。

この時期、国文学者・岡野弘彦先生の「古事記全講会」を受講する機会を得て、直接お教えを受けることができたのは大きな幸せでした。

そして二〇一二年、徳間書店から『はじめての古事記 日本の神話』(竹中淑子 根岸貴子文 スズキコージ絵)が刊行されたのです。『古事記』の誕生から一三〇〇年目の、記念すべき年でした。

児童書とはいえ大人からも、「この本なら最後まで読み通せた」「これをきっかけに日本の神話に興味をもった」という感想が寄せられたのは、うれしい驚きでした。

日本神話の世界への入り口として、『はじめての古事記』をお読みになってみませんか。

根岸 貴子 氏

一九九四年所沢市に、竹中淑子氏と、子どもの本研究所を設立。

著書に『ちいさいじてんしゃりんちゃんのおはなし』福音館書店「こどものとも年中向け」など

第21回所沢図書館まつり

パネルと図書展示

「所沢の歴史」より

令和二年十一月十四日(土)

所沢図書館本館 集会室

所沢図書館本館で行われた、第21回所沢図書館まつりは、新型コロナウイルス感染症防止のため、例年より規模を縮小しての開催となりました。

当日は、所沢にゆかりの深い二名の作家に寄稿いただいたエッセイを展示しましたが、今回は特別に、ご覧下さい。

私の「所沢愛」

高橋 こうじ

どんな土地にもそれぞれの魅力がある。それはよくわかってはいるが、所沢を出ようと思ったことは一度もない。なぜ、これほど所沢が好きなのか。

理由の一つは名前である。「ところざわ」という言葉は本当に美

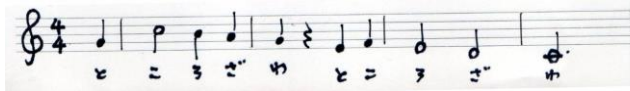
しい。「ところ」まで母音Oの音が三つ並び、そこから口を大きく開く母音Aの「ざわ」へ飛翔する。これを発音すると、地面をしつかり踏んで空を見上げる気分になる。

幼い頃からこの響きが好きで、「ところざわ」と言うたび、聞くたびに喜びを感じてきた。高校時代、文集の「好きな言葉」の欄に「ところざし」と書いたが、これは「ところざわ」と発音が似ているから好きになった言葉である。

二十歳を過ぎた頃には、節をつけて歌っていた。こんな旋律である。

やがて、週末にジョギングをするようになると、市内を走り回って、航空公園で、狭山丘陵で、景色に感動するたびにこの歌を口ずさんだ。私の「所沢愛」が他の人より強くなったのは、たぶんこの習慣のおかげだ。

ところで、この旋律は私の創作だと思っていたのだが、最近になって違うことがわ



かった。所沢市立北小学校の校歌の最終節がこの旋律だったのだ。

歌詞は「ところざわ、ところざわ」ではなく「ところざわ、きたしよらがっこう」である。これには驚いた。私は小手指小学校出身で、この歌は知らなかったからだ。ただ、四歳上の姉が一時期、北小学校に通っていたので、おそらく彼女が家で口ずさんだ一節が、三歳ぐらいの私の心に染み込んだのだろう。自作でなかったのは残念だが、調べてみると、この校歌は作詞が佐藤春夫、作曲は「椰子の実」の大中寅二だから、三歳の私は名曲を聞き分ける耳を持っていたのである。

もちろん、「ところざわ」という音の美しさだけでは「所沢愛」は育たない。所沢には、天、地、水、人がそろっている。航空公園へ行けば心は空へ舞い、荒幡富士では大地を感じ、狭山湖では深い緑を映す水と向き合える。そして、人。少し動けば花の都民なのに埼玉側に住む人々は、つましくて穏やかだ。店の人、街の人に親切にしてもらったときも、私は「ところざわ、ところざわ」と歌う。この場合は回りに人がいるので、心の

中で、だが。

よく聞くのは、他の土地から来た人が多いので、住民の連帯感が薄い、という話だが、これは、みんなの感性が一つのものを共有できれば解決されるだろう。そして、共有するものとして一番いいのは「ところざわ」の響きを生かした短い歌、サウンド・ロゴのようなものだと思う。前述の歌がそれになってほしかったが、替え歌では体裁が悪いし、やや長い気もする。才能ある若い人が新たな旋律を作り、住民の多く、いや、住民以外の人も、所沢が話題になるたびにそれを口ずさむようになったら、私たちは柔らかくも強靱な絆で結ばれ、全国の人がそれをうらやむのではないか。

高橋 こうじ氏 紹介

所沢市生まれ、所沢市在住。

テレビ、舞台の仕事を経て文筆家に転じ、言葉や会話に関する研究に力を注いでいる。

著書に『日本の大和言葉を美しく話す—ところが通じる和の表現—』『日本の言葉の由来を愛おしむ—語源が伝える日本人の心—』など。

私と所沢

すなが
須永 紀子
のりこ

26年前、初めて新所沢に降りたとき、懐かしい場所にもどってきたような気持ちになりました。転居先を探していくつかの街を訪れたのですが、新所沢にはわたしが生まれ育った街のむかしの雰囲気があったのです。



図書館まつり パネルと図書展示「所沢の歴史」 当日の様子

東京オリンピックピックが開かれた1964年、都心には首都高速が作られて、住んでいた渋谷のはずれも変貌したけれど、その少し前には原っぱや崖があり、子どもたちは暗くなるまで外を駆けまわっていました。日本全体が質素な生活をしてきた時代、高度成長期の真ただ中にカラーテレビや洗濯機などが登場し、大人も子どもも希望にあふれて、世の中は活気に満ちていました。ささやかな夕食

を囲み、夜には家族でテレビを見る。その時代の空気を思いだして、所沢に住むことを決めました。

駅からまっすぐ伸びるけやき並木は新緑も落葉のころも見飽きることがありません。豊かな緑の地がわたしの原風景になり、そのなかで詩が生まれました。駅前広場の女神像、台風のあと舗道に散らばった小枝、その上を歩くときのピシピシという音、旧公民館。この街を背景にして、1998年から今まで4冊の詩集を作りました。来年の春には新しい詩集ができ

ます。わたしにとって所沢は開運の地のようです。

また、航空記念公園は自分の庭のように親しい場所です。お花見はもちろん、最近のリフレッシュするたけに出かけます。緑と水を眺めていると身のうちに元気が満ちてきます。家から歩いていくことができる距離なので、よい散歩コースにもなっています。

西所沢に転居してからは毎日のように東川沿いの道を歩いています。小さな流れですが、季節の移ろいによって表情が変わります。春には桜とミモザ、夏にはタチアオイが川を縁どり、カモやシラサギ、アオサギを見かけることもあります。全長5・4kmの東川に沿う707本の桜は東京オリンピックを記念して植樹されたこと知り、うれしくなりました。わたしの第一詩集のタイトルは『シヨランダールは金髪だった』。シヨランダールは東京オリンピックで5つの金メダルを獲得したアメリカの水泳選手の名前なのです。

市制施行70周年の今年、所沢市民文化センター・ミューズがリニューアル・オープンされたことを一市民としてたいへん喜ばしく

思います。地元で国内外の芸術文化に接することができる貴重な場所、再開を心待ちにしていました。この機会にこれから所沢がアートの街になっていくことを願っています。そのために美術館を建てるといのはどうでしょう。小さな建物でもよいから現代美術の作品を展示してほしいと思います。公園のなかに美術館ができれば、誰でも気軽に立ちよることができましょう。未来の巨匠が生まれるかもしれせん。そしていつの日か文学館が建つことを祈っています。



須永 紀子氏 紹介

東京都生まれ。所沢市在住。
1982年に個人誌『雨期』を創刊、現在75号まで発行。
詩集に『森の明るみ』、『空の庭時の径』、『中空前夜』、『至上の愛』がある。「文芸所沢」選考委員。

所沢歴史物語

さて前号では、江戸時代の所沢村の時代からはじまり、昭和25年（1950）11月3日に「所沢市」が誕生、昭和30年（1955）4月に現在の市域となるまでの歴史を紹介しました。

今号では、その後の所沢市にまつわる歴史エピソードをいくつか紹介していきます。

ニュータウンの建設

昭和34年（1959）、所沢市に大きな転換をもたらしたのが、北所沢駅（現在は新所沢駅）近くに完成した新所沢団地（北所沢ニュータウン）でした。

農地と雑木林を開発して作られたこの団地（公募で緑町と命名）は、戸数約2500戸、住民の9割が東京からの転居者で、上下水道と都市ガスを完備、さらにダイニングキッチンとステンレスの流し台を備えるなど、所沢に新しい風を吹き込み、市民の羨望の的となりました。

この緑町に続いて、榎町、向陽

町、松葉町など、新所沢地区には新たな住宅街が次々に誕生します。

さらに昭和30年代後半、所沢市初の区画整理事業（所沢第一区画整理事業）によって北有楽町・喜多町の住宅街が、民間の大規模開発によりこぶし団地が完成し、所沢は東京近郊の住宅都市として発展していきます。

南永井の

オリンピック競技場

そんな開発・発展の最中であった昭和37年（1962）11月、所沢市の柳瀬地区南永井が、東京オリンピックのクレー射撃競技会場に正式決定します。

オリンピックが近づくにつれ、市ではさまざまな準備活動が行われます。例えば、寄生虫、蠅・蚊の駆除や消毒・清掃、公衆道徳を高める標語の募集、役所・学校・駅などに花壇を造る街の美化活動などです。

射撃競技の本番は、昭和39年（1964）10月15日から3日間、

28か国の選手が参加して行われます。飛行する素焼きの皿を散弾銃で射ち落とすクレー射撃は高い集中力が必要で、競技中は観客にも静かな雰囲気求められました。南永井での競技はイタリアのE・マツタレリ選手が金メダルを獲得して無事終了し、競技場や観客のマナーは選手たちに変好評だったそうです。

米軍基地返還運動

昭和42年（1967）、所沢市の人口は10万人を超え、それ以降も急激な増加が続きます。

そんな所沢市にとって都市計画の障害となったのが、拡大した市街地の中心に位置しており、必要な公共施設や開発が進む郊外と市街地を結ぶ幹線道路の建設を妨げていた米軍基地の存在でした。

当時の所沢の米軍基地は、現在の3倍以上の面積がありました。すでに昭和30年代末から基地機能は縮小されて広大な空閑地が目立っており、基地返還と地元民のための利用を訴える声が高まる一因となっていました。

しかし、返還までの道のりは一筋縄ではいかず、昭和41年（19

66）の基地閑散地の一部借用を求め、1万名署名運動、昭和42年の基地全面返還運動市民大行進、昭和43年の所沢市基地対策協議会の正式発足と度重なる陳情・交渉の結果、昭和46年（1971）に第一次返還が実現、さらにその後第二次、三次返還により、約7割が返還されます。

所沢のイメージの広がり

昭和50年代頃から、所沢は「基地の町」から、住宅・商業のまちへと様相を変えていきます。

昭和46年の米軍基地一部返還を受けて、基地跡地には団地や公共施設が続々とつくられ、市内各地でも土地区画整理事業や宅地開発が続きます。

また、昭和50～60年代にかけて、長く都市施設が未整備であった所沢駅周辺に、ダイエー所沢店や再開発ビル「ワルツ」が、また新所沢駅前のパルコなど大型の商業施設が完成しました。

このように開発と発展が続いていたこの頃、所沢の名前が徐々に全国に広まっています。

その理由のひとつが、昭和54年（1979）に完成した西武球場（当時）を拠点とする、プロ野球・西武ライオンズの始動でした。初

年度は最下位に終わったライオンズですが、昭和57年には球団誕生4年目にして、初のリーグ優勝とプロ野球日本一に輝きます。

折しも昭和51年(1976)、所沢商業高校野球部が甲子園に初出場を果たし、その後も53年、58年と夏の大会に出場するなど、昭和50年代の所沢は野球の話題に事欠きませんでした。

また昭和57年に大字松郷に陸運事務所所沢支所が開設されて「所沢ナンバー」の車が誕生。その後の昭和62年(1987)には早稲田大学、平成元年(1989)には日本大学が相次いで所沢キャンパスを開校し、都内有力大学の所沢進出が続きます。

この時期、これらの出来事を背景に「埼玉県西部の中核的都市」としての所沢イメージが作られ、全国に広がっていったのです。

ダイオキシン類などによる

環境問題の発生

昭和が終わる元号も平成に改まった平成2年(1990)、所沢市は市制施行40周年を迎え、県内で4番目に人口30万人を突破します。

しかしそれから数年たった頃、今度は所沢のネガティブなイメージが全国に広がる出来事が起こります。

平成8年(1996)、三富周辺地区の行政区境に産業廃棄物焼却炉が集中、ばい煙やダイオキシン類による環境問題の発生が新聞やテレビなどで取り上げられます。

これを契機としてダイオキシンの有害性が大きく報道されるとともに、所沢には「ダイオキシンのまち」というイメージが広まってしまします。

所沢市では、この問題の解決のため、平成9年(1997)に市民と行政が協働で市民会議を発足させ、同年、環境基本条例と全国初のダイオキシン条例を制定します。

その後もゴミの分別収集方法の改善や平成12年(2000)の国際環境規格ISO14001認証取得、さらに平成15年(2003)の有害物質発生を極力抑える最新設備を備えた東部クリーンセンター、環境教育を目的とするリサイクルふれあい館のオープンなど、未来の市民に良い環境を引き継ぐため、環境改善が取り組まれていきます。

平成から令和時代の幕開けへ

平成30年(2018)7月、所沢の人口は過去最多の34万4千470人に達します。しかし平成元年と比べて、65歳以上の割合が6%から26%へ上昇した一方で

出生率は10.6%から6.8%に下がり、平成を通じて少子高齢社会となってきたことがわかります。

平成31年(2019)5月1日、浩宮徳仁親王が新たな天皇となつて平成時代は終わりを告げ、時代は令和に突入します。

その幕開けとともに、令和2年(2020)11月、東所沢に「ところざわサクラタウン」がグランドオープンします。

これは株式会社KADOKAWAが、平成26年(2014)に取得した所沢浄化センター跡地に建てた文化・商業複合施設で、所沢市とKADOKAWAが共同で進める地域づくりプロジェクト「COOL JAPAN FOREST構想」の拠点施設ともなっています。

また同敷地内には、世界的建築家の隈研吾氏がデザイン監修を行った、2万枚の花崗岩を用いた隆起する石の塊を思わせる姿の角川武蔵野ミュージアムや、同じく隈研吾氏が監修し、元号「令和」を考案したとされる国文学者、中西進氏により命名された神社「武蔵野坐令和神社(むさしのにますうるわしきやまとのみやしろ)」など、メディアにも注目される様々な施設があります。

まだ始まったばかりの令和時代、所沢はこれからどんな歴史を歩んでいくのでしょうか。

おわりに

今号では所沢市の現在までの歴史エピソードをご紹介します。

より詳しく知りたい方は、ぜひ所沢図書館の関連資料をご覧ください。

また所沢図書館も所沢市と共に歴史を積み重ねてきています。

そんな所沢図書館の歴史をまとめた「所沢図書館のあゆみ」は、図書館広報誌「いずみ」バックナンバー(復刊1〜2、8号(通巻79〜80、86号)に掲載しています。ホームページからもご覧いただけますので、前号、今号と併せてぜひお読みになってください。

【参考文献】

- 『所沢市史 下』所沢市史編さん室／編 所沢市 1992年
- 『ところざわ歴史物語』所沢市教育委員会、編 所沢市教育委員会 所沢市 2020年
- 『ふるさと所沢 所沢市制施行60周年記念写真集』郷土出版社 2010
- 『新所沢団地(緑町)の始まり』池田義明／編 2004年
- 『基地返還を求めて』所沢市基地対策協議会 1989年
- 『ダイオキシン・ゼロのまち』をめぐって『ダイオキシン汚染から環境と健康を守る所沢市民会議編 2001年』武蔵野樹林 vol.5』角川文化振興財団 2020年
- 『所沢 Walker』KADOKAWA 2020年



図書館活用法

これまで所沢図書館で解決した、レファレンス(皆さんの疑問に対して必要な資料を探すサービス)の一例をご紹介します。今回は特別に、回答した資料を元に、読み物としてお楽しみいただけるようにしました。

Q 坂田金時(金太郎)について知りたい。

A 坂田金時は、平安時代中期の武人で、「まさかりかついで きんたろう」の童話で有名な、金太郎のことだと言われています。

伝承では、金太郎は相模の国・足柄山の山奥で母の山姥やまんばとともに暮らしていました。山姥と聞くと長い白髪の老婆をつい想像しますが、実は善悪両方の伝承が残っています。人びとに不利益を与える恐ろしい老婆と伝わることも多いのですが、その一方で、人間に幸をもたらす存在とみなされ、山の神に属し、里山を祝福するために訪れる山人とも伝えられています。金太郎の母は善の山姥と言われています。
そんな金太郎ですが、幼い頃から体が大きく、力持ちであったため、

山の動物達と遊んで暮らしているうちに、熊に対しても、相撲で勝るようになりました。

そしてある日、足柄山をこえていく武士の一人の大將である源頼光みなもとのよりみつに見いだされ、坂田金時さかたかんとしの名を与えられ、家臣としてともに

上京しました。金時は渡辺綱わたなべのつな 確井貞光さだみつ、卜部季武うらべのすえたけとともに、頼光の四天王と呼ばれる立派な武士になりました。頼光と四天王は大江山しゅてんどうじの酒呑童子や蜘蛛塚つちぐもの土蜘蛛を退治して豪快な武勇談を残しています。

そんな伝承が残されている坂田金時は、実際には平安時代中期に源頼光に仕えた武士であることしかわかっていません。生没年や生涯についても正確なことがわかっていないのです。名前も坂田という姓は江戸時代になってから見られるようになり、それ以前は金時ではなく、公時と記されていました。

さらに、坂田金時は創作された人物で、そのモデルになった人物は平安時代に活躍した下毛野公時しもつけのきんときである、とも言われています。

以上、坂田金時(金太郎)のお話

でした。金太郎伝説については、地域によって様々な伝説があり、今回紹介したものは違うものも多く存在しています。坂田金時(金太郎)は謎が多く、判明していないことが多いことも魅力の一つですね。

【この質問は国立国会図書館レファレンス協同データベースに登録されています。】
管理番号：所沢吾妻15020-08

https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000290298

所沢図書館では電話やWebでもレファレンスを受け付けております。(利用券とパスワード発行が必要です)
ぜひ、活用してみてください。

【参考文献】

- 『金太郎伝説』 金太郎・山姥伝説地調査グループ／編集 夢工房 2008年
- 『日本昔噺』 巖谷小波／著 平凡社 2001年
- 『金太郎の誕生』 鳥居フミ子／著 勉誠出版 2002年
- 『金太郎の謎』 鳥居フミ子／著 みやび出版 2012年
- 『国史大辞典』 国史大辞典編集委員会／編 吉川弘文館 1993年

編集発行：所沢市立所沢図書館 〒359-0042 所沢市並木 1-13
ホームページアドレス パソコン <https://www.tokorozawa-library.jp/>
スマートフォン <https://www.tokorozawa-library.jp/opw/OPS/OPSINDEX.CSP>

電話 / FAX

本館	04-2995-6311 / 04-2992-1421	富岡分館	04-2943-3636 / 04-2943-6680
所沢分館	04-2923-1243 / 04-2928-8195	吾妻分館	04-2924-0249 / 04-2928-8250
椿峰分館	04-2924-8041 / 04-2928-8148	柳瀬分館	04-2944-4023 / 04-2945-7236
狭山ヶ丘分館	04-2949-1193 / 04-2949-8577	新所沢分館	04-2929-1905 / 04-2929-1906
松井小学校図書館	04-2992-2796 / 04-2992-2797		